

毎日がクリスマスなら

竹 内 富久恵

奨励者紹介〔たけうち・ふくえ〕

日本キリスト教団神戸愛生伝道所・北須磨教会牧師

イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒にいる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。

その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。

(マタイによる福音書 1章18—25節)

2013年12月24日の『毎日新聞』朝刊に、「毎日がクリスマスならいいのに……。子どもの時、こんな思いにひたった人は多いだろう」という書き出しではじまる社説が掲載されていました。この社説に引用されていたのは、NHKが数年前に放送した米国ドラマ「アリー・マイ・ラブ」のエピソードです。ある老教師が、自分はサンタクロースであり、そして毎日がクリスマスなら…と言っていることに対して、学校側が「妄想にかまけ子どもに悪影響を与える」と解雇し、そして解雇された彼が訴訟を起こした中でのことがこのように引用されていました。

「毎日がクリスマスですって？」分別を疑う学校側の弁護士に老教師は語る。「あなたが子どもたちの望みをかなえようとしているかどうか。老いていく者の弱さや孤独を思いやる用意があるかどうか。友人に好かれているかどうかではなく、自分からもっと好意を寄せたいと思っているかどうか。思っているならクリスマスだ、毎日がね」。

そしてこの社説は、このように締めくくられていました。

この1年、悲しいこと、残念なことがいろいろ起きた。嘆きや憤りもたくさん聞いた。だが、人々が心の

奥底で求めるのは、争い傷つけ合うことよりも、手をさしのべ助け合うことではないか。毎日がクリスマスなら。それは妄想ではないと思う。

2008年のクリスマスの社説にも、とてもよく似た締めくくりの言葉が書かれていたのですが、その時は、チャールズ・ディケンズの『クリスマス・キャロル』という物語が紹介されていました。主人公はスクルージという、物語の中では「並外れた守銭奴で、人の心を石うすですりつぶすような情け知らず」と表現されているような人物です。ところがクリスマスの精霊に連れられて、過去、そして、未来の自分を見せられ、本当に自分はこのままでいいのか、と疑問をもったところに、貧しい人々がクリスマスをささやかに、しかし、あたたかく祝っている様子を見て、「改心する」というのが物語の大まかなあらすじです。この物語が書かれたのは、19世紀の「飢餓の40年代」と言われた窮乏の時代だったと記事にはあり、またこの『クリスマス・キャロル』を引用した社説が書かれた2008年というのは、金融危機で経済不況がおとずれ、失業や倒産が人々を襲った、そういう年でもありました。ですから、「『クリスマスなんてめでたくない』との悪態に思わず同感したくなる方も少なからう」とこの社説の中にも書かれているのですが、「しかし」という言葉で社説はこう続くのです。「しかし、窮乏の時代が『クリスマス・キャロル』(という物語)を生んだように、人がやさしさとぬくもりを分かち合うところに新たなクリスマスの奇跡も生まれよう。今夜がそんなイブになればいい」[『毎日新聞』2008年12月24日余録()は奨励者]。

ヨセフの決断

聖書には四つの福音書がありますが、今日読んだのは、聖書に書かれているクリスマスの物語の中でマタイによる福音書にだけ書かれている話で、ヨセフというのは、イエスの母マリアの婚約者であった人です。マリアのところに天使がやってきて、あなたは神さまの力によって子どもを授かります、その子をイエスと名付けなさい、と言ったという話は、一般的にも知られていると思うのですが、そのとき、マリアの婚約者だったヨセフについては知らないということも、一般的には多いのではないかと思います。その意味では、ヨセフというのは、クリスマスの物語における中心人物ではなく、脇役的な語られ方をしてきた存在であるかと思います。しかし、今日の聖書の話を読むとき、その脇役的な存在であるヨセフが、実はイエスの誕生にかかわるすぐ重要な決断をしていたこと、イエスの誕生に欠かすことのできない存在だったということがわかるように思うのです。

イエス・キリストの誕生の次第は次のようであったとして、聖書は、「母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった」と続けます。それに対してのヨセフの反応は「マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した」ということです。ヨセフからすると、とにかく婚約者のマリアが、自分の知らないうちに妊娠していた、ということが自分に突きつけられた事実であったということなのだと思います。聖書の舞台となっている当時の社会では、律法という宗教的なきまりが非常に大事なものとされていました。その律法では、夫や婚約者とは関係のない妊娠をした女性は、訴えられ、石打の刑に処せられると決められていましたから、本来であれば、ヨセフがマリアのことを訴え、マリアを処刑するというのが「正しい」とされる在り方であったはずですが、ヨセフは表ざたにせず、ひそかに縁を切ろう、と考えた。聖書はその理由を「夫ヨセフは正しい人であった

ので」と書いていますが、ここでの「正しい人」の意味は、むしろ律法をちゃんと守る人、という意味ですから、それを曲げて、マリアのことを表ざたにしないでひそかに縁を切ろうとしたというのは、ヨセフにしてみれば、マリアのため、自分ができる精いっぱいのことであつたということなのかもしれません。確かにここでマリアとひそかに縁を切れれば、マリアの命はひとまず守られることにはなつたでしょう。ヨセフも周囲の人々から噂をされたりはするにせよ、ひそかに縁を切りそれでおしまいにしてしまえば、いつしか人々はそんなことを忘れ去っていったことでしょう。しかし、縁を切られた後マリアとお腹の子どもはどうなってしまうのか。父親のいないままに子どもを産んだ女性が当時の社会でどのように扱われたかということから考えれば、想像は難しくありません。そしてそれは当然ヨセフにだって想像できるはずのことですから、別な見方をすれば、ヨセフはマリアをひとまず助けた、しかし、自分がやるのはここまで、あとはもう自分には関係ないことだとかのようにしてマリアとそのおなかの子イエスを、切り捨てようとした、ということでもあつたのだと言えます。しかし、そんなヨセフが、夢で天使に語りかけられ、「神は我々と共におられる」と示され、マリアそしてお腹の子どもと共に生きていくことを決断するように動かされていった、そのようなヨセフの大転換を、決断を、今日の聖書は語っていると思うのです。おそらく周囲の人々は、そんなヨセフのことを、嘲り蔑んだことでしょう。しかし、そういう周りの評価なんて超えていく、そんな決断、あるいは自分がやるのはここまで、あとは自分には関係ないと自分を守りながら引いた線を越えていく決断をヨセフがしたことによって、マリアは生き、そしてイエスが生まれた。それは、「友人に好かれているかどうかではなく、自分からもっと好意を寄せたいと思っているかどうか。思っているならクリスマスだ、毎日がね」と、「アリー・マイ・ラブ」に登場する老教師が語ったように、ヨセフが、自分の方からマリアと今から生まれるイエスに心を、そして、自分という存在を寄せていったということなのだと思います。そのヨセフの姿が、「神は我々と共におられる」ということの中を人が生かさずはじめていく、そういう姿として今日の聖書箇所には描かれていると私には思えます。それはこのはじめてのクリスマスにおこされた奇跡のうちの一つでもあつたのではないのでしょうか。

それでも、うなずきたいと思うのです

最初にご紹介した、「毎日がクリスマス」、この社説の締めくくりの言葉をもう一度読んでみます。「この1年、悲しいこと、残念なことがいろいろ起きた。嘆きや憤りもたくさん聞いた。だが、人々が心の奥底で求めるのは、争い傷つけ合うことよりも、手をさしのべ助け合うことではないか。毎日がクリスマスなら。それは妄想ではないと思う」。5年前の『毎日新聞』に書かれた言葉ですが、今年の新聞に書いてあっても何の違和感もない、そのような言葉であると感じます。この1年も、繰り返し多くの天災が起こりました。なぜこんなことが、と苦しくなるような出来事も多く起こりました。強さを求めることを正解とするかのような社会の中で、「生産性のあるなし」を人の価値の基準にするようなことも繰り返されています。経済活動に資するものはよいもの、そうではないのは無駄なもの、というような価値観がより当たり前化していついかに私には感じられます。強い立場にあれば何をしてもいいというかのように、いのちとくらしが脅かされている只中からあげられている声をちゃんとときとらないままに出来事を動かすことが、まるで「当たり前」であるかのような状況も続いていると私には思えます。その一方で、ささやかなくらし、ささやかないのちの営みの大事さ、そのかけがえのなさが本当に守られているだろうか、守ろうとしているのだろうか、

と疑問を覚えずにはいられない。そんなところで私たちは多分生きていて、もしかして「神は我々と共におられる」という恵みを人は自ら手放していこうとしているのではないか、そう思ったりもします。そして強さを求める流れの中では、弱さは置き去りにされていきます。一人ひとりが抱えている大変さ、生きづらさも、置き去りにされて、あとは必死に自分で頑張るしかない、そんな中で、あなたは大事だという神さまのメッセージがどれほど届くというのだろうか、そんなことも、このところずっと考えさせられています。

それでも「人々が心の奥底で求めるのは、争い傷つけ合うことよりも、手をさしのべ助け合うことではないか。毎日がクリスマスなら。それは妄想ではないと思う」という言葉に、私は、そうだ、そのはずだ、と何度もうなずきたいと思うのです。

アドベントに毎年思い出すこと

私は二つの教会で働いていますが、本務教会である神戸愛生伝道所は、障がい者の方たちが暮らす神戸愛生園という施設の中で礼拝をしている教会で、礼拝に出席されている方のほとんどは施設で生活しておられる方たちです。伝道所に赴任して今年で19年目になるのですが、伝道所の礼拝に出席されているか否かにはかかわりなく、希望される方の葬儀の司式をこれまで何度もさせていただきました。その中のお一人、Kさんという方の葬儀をさせていただいたのはちょうど今と同じ、アドベントの期間に入った辺りのことでした。開設当初から園で生活されていた方だったのですが、天に召されるまでの2年ほどは体調を悪くされ、その2年のうちのほとんどを病院で過ごされることになり、最期も、園の近くにある病院で天へと召されました。ご利用者の方が亡くなられると、自然と、職員や他の利用者の方たちとその方のことをさまざまに話すわけですが、お元気だった頃は、いわゆる「小言」を含めいろいろなことを仰る方でしたから、私もその一人ですが、彼女に怒られたとか、注意されたとかいう者はかなり多く、あんなこと言われた、こんなこと言われた、という話を、棺の中におられるKさんの隣で、泣きながら笑いながら話したこと、今もよく覚えています。Kさんのところにお花を届けにこられた利用者の方が、「ほんま、あれこれ、あれこれ言うから、うるさい、うるさい、言うたりしてたなあ」と仰ったり、「よう喧嘩したんですよ、でもいろいろ教えてくれた方でした」そんなことを職員が話したり。そして、ご自分で意思表示のできない同室の別の利用者の方のことをいつもとても気にしておられたこと、ご自分の体調が良くなく、ゼーゼーと苦しい息をしているような時にも、「その同室の方が大好きなアンパンを、自分が買ってこない」と、とてもとても気にしておられたことを、そうだよね、と互いにうなずきながら話したりもいたしました。

一方で、葬儀では、私たちもお顔を知らないご兄弟が来られて、「喪主」をされました。「昔な、きょうだいから『こっちにも家族があるんやから、考えてもらわんと』って言われたことがあるねん」と伺ったこと、また若い頃発病され、そのことによって、とても大切な人との関係が切り裂かれたことを伺ったことを思い出しながら、そんなふうな、家族や、大事な人たちとの関係を断たれ、いのちの豊かさを奪われた痛みの断片に触れさせてもらってきたことを思い返しつつ、葬儀でのお話の準備をしながら考えたこと。それは、小言も、同室の方にアンパンを買ってこなきゃ、とゼーゼーと息をしながら気にしておられたことは、同じことだったのだ、ということでした。それは人に思いを寄せ続けてこの方が生きられたことの表象ではないか、自分を守りながら線を引くのではなく、自分から人に近づいていく、そういうありようを彼女は生きられたのだと。それはもしかすると、家族や、大事な人たちとの関係を断たれ、いのちの豊かさを奪われた痛み

のゆえに、彼女が選び取った生き方であったのかもしれませんが。アドベントの時期には、私はどうしてもこの方のことを毎年繰り返し思い出してしまうのですが、そうやって、失った痛みをもちながら、苦しさを抱えながら、そこからまた、もしかすると「それゆえに」、人と共にあるところで、つながるところで生かされ、生きるというありようを、私は彼女から知らされたのだと思っています。そうやってヨセフに与えられたような神さまの働きのうちに私たちは生かされていくし、そこで私たちはクリスマスの出来事と出会っていくのではないでしょうか。

毎日がクリスマスになりえる、その恵みの世界へ

もう一つの社説に書かれていた言葉をもう一度読み直してみたいと思います。「しかし、窮乏の時代が『クリスマス・キャロル』（という物語）を生んだように、人がやさしさとぬくもりを分かち合うところに新たなクリスマスの奇跡も生まれよう」。ヨセフとマリアがそうだったように、むしろ状況が厳しいのだとすれば、その厳しさの中にこそ生まれるイエス・キリストを、与えられるクリスマスの奇跡を信じていけたら、「神は我々と共におられる」という恵みの世界を生きることができるようにと働きかけられていることを受け止めていけたら、そう願います。毎日がクリスマスになりえる、その恵みの世界へと開かれ、向かわされていく一人ひとりであれたらと祈ります。

2018年12月5日 京田辺水曜チャペル・アワー「アドベント礼拝奨励」記録